



みんな
育てる

地域福祉

- 取材協力 ●
- きずなファーム
- 〒960-8057
- 福島市世木野字長畑13
- TEL (090) 1933-4738
- (亀田和行さん)



避難先でも浪江町の仲間とつながりを!

～農作物づくりで笑顔になろう～



浪江町からの避難者が運営する「きずなファーム」。収穫した白菜は外側の葉をはいでテープで束ね、きずなファームメンバーの写真が印刷されたシールを貼ります。今が旬の白菜の値段は、大きいもので120円、小さいもので100円とお買得。

畑に集ってこそ

東京電力福島第一原発事故の影響により避難を余儀なくされている市町村のひとつ、浪江町。温暖な気候と豊かな自然に恵まれた土地柄を活かし、多くの人たちが農業を営んできました。避難先でも慣れ親しんだ農業をとおして仲間とつながりを存続させようと、福島市の農家から土地を借りて農作物づくりに励んでいる「きずなファーム」をご紹介します。

浪江町の仮設住宅は福島市、二本松市、本宮市、相馬市、桑折町の5市町に設置されており、県内における避難者町村の分散数は最も多くなっています。借り上げ住宅に至っては県内外におよび、人々は各地に離散している状況が続いています。3月12日に着の身着のまま浪江町から避難し、避難所での生活が数ヶ月続きました。初夏の頃に福島市の借り上げ住宅に移ったのですが、隣近所は知らない人ばかりで交流がなく、しかも専業農家だった私にとって、農作物の栽培ができない生活



「当時は浪江町の楡原地区・牛渡地区に住んでいた方を誘って活動する予定でいました。まだ連絡をとることできていない方もいますので、春先に向けて声掛けを広がっていただけ」と亀田和行さん。

活は砂漠にいたようなものでした」と話すのは販売担当責任者、亀田和行さん。仮設住宅において足元のコミュニティを活かした地域での入居ではないため、隣近所との付き合いが希薄であることを亀田さんは耳にしました。「何とか農作物の栽培をとおして浪江町の人々と交流を図り、つながりを維持したい。そんな思いが生まれ、みんなと一緒に畑仕事ができないのかと郷の牛渡喜一郎さんに相談したところ、7月・牛渡さんの伝で福島市の茂木健一さんから農地を無償で借りることができ、念願のきずなファームを立ち上げることができました」と亀田さんは笑顔を見せます。

農作業は誰かが参加しやすい「サロン」。

きずなファームを営むメンバーは、浪江町楡原地区と牛渡地区に住んでいた18世帯25人。そのうちのほとんどは農家でしたが、なかには以前と畑違いのメンバーもいます。「福

島市内をはじめ二本松市や郡山市のほか、白河市、いわき市、遠くは栃木県からも畑に集まって来るんですよ。メンバーは浪江町の顔見知りばかりで、気兼ねなく何でも話ができますからね。仮設住宅では入居者同士の親睦を深めるサロンが開催されていますが、参加するのは女性が多とんど。でも、ここは男性でも来やすいサロンです。「愛」と亀田さん。一度は崩壊してしまった浪江町のコミュニティですが、きずなファームは人々をつなぐ場として機能しています。亀田さんは、農作物づくりを通じてコミュニティを継続させ、いつかみんなで浪江町に帰れたら、と決意を新たにしています。



「同じ福島市でも浪江町の人が入っている場所はパラパラ。きずなファームは、なかなか会えない仲間と顔を合わせる良い機会になっています。やはり、浪江町に早く帰りたいね、という話題が多いです」と牛渡喜一郎さん。

メンバーの笑顔が、助け。

メンバーは8月、野菜を中心とした農作物の栽培を始まりました。0.5ヘクタールの農地を耕し、種を蒔き、肥料を与え、秋にはキャベツ、ニンジン、カブなどの野菜を収穫しました。今の時期は、冬の旬である白菜、大根、ほうれん草などの収穫が活動の中心になっています。生産物はメンバーで分け合って食べたり、知り合いに配布するほか、1日おきに入パーへ卸しています。出荷前には放射能検査を行い、安心して消費者に購入してもらえるよう取り組んでいます。生産物の放射線量は安全とされる数値ですが、売れ行きはあまり芳しくありません。収入を得ようという思いで始まったわけではなく、浪江町の仲間と集まって楽しむことが目的でしたので、農作業をしながらみんなの笑顔を見ることが、儲け、だと思っています。でも、

いつか浪江に戻れる日まで、避難先でもきずなファームを営む力

春から栽培を再開するためには種や肥料の資金が必要ですので、ある程度の利益がないと続けるのは難しいというのが正直なところです。栽培担当責任者・牛渡さんは厳しい現実を話します。メンバーは、浪江町の人々との交流を継続させるため、福島市などの仮設住宅に出向く移動販売にも着手しました。「仮設住宅の入居者は高齢の方が多いため、移動販売は大変な負担です。知り合いが買に来てくれるときには、販売よりも雑談で盛り上げることもしばしば。今後親睦を絶やさないようにしていこうと、何より大切だと思えます」と牛渡さん。人々との触れ合いがきずなファームの原動力となっています。



この日は丸々と大きく育った白菜50個、キャベツ16個を収穫しました。「この前採れたニンジンは甘くておいしかった。雪が降っても収穫できる野菜があるから来なくちゃね!」。



「つらい状況のなか団結して農作物を作り続けるきずなファームの皆さんの姿はすばらしい。農作物を栽培するために同郷の仲間がこんなに集まる避難者の方々を珍しいですよ」と農地提供者の茂木健一さん。

江町に戻ることができるとは分らないけれど、いつか来るその日まで自分ができることを協力したい」と茂木さんは力強く話してくれました。避難先で地元の方の協力を得て農作物栽培の再開を果たしたきずなファーム。先が見通せない生活のなか、農作業を行うことがメンバーの気力の源泉ともなっています。今後ますます浪江町の人々の絆を深め、きずなファームとなりそうです。